第３セッション質疑応答
ネットワークの活用が想定される事例

（伊藤）　ありがとうございました。

それでは、二つの発表につきまして、ご質問、ご意見がございましたら、お願いいたします。浅沼先生、お願いします。

（浅沼）　今の石川さんのご発表で、内容的にはカンボジアの農家に稲（コメ）が不足しているから、魚を売らなければいけないというのは、すごく参考になりました。

それとは別に、これだけの連携を作っていますね。最後の方のお話で、それは個人的なルートで、例えば科研費で共同研究をするから、一緒に仲間にならないかというように集められたようですが、それ以外に、この連携を作るためにやられたご苦労や工夫などは何かありますか。もし参考になればと思いますが。

（石川）　ちょっと話が長くなりますが、私がこの活動を始めたのは、私がJICAの専門家でマレーシアに行きまして、当時、SEAFDEC（Southeast Asian Fisheries Development Center：東南アジア漁業開発センター）というところに２年半ほど勤めていました。それ以前は、私は要素科学の研究者で、それこそ集団遺伝学の研究者でしたので、全く違う分野です。ただ、SEAFDECに行ってコーディネーターをしているときに、私がいる約３年の間に、アメリカやカナダなどの留学生がたくさん来て、経験を積んで帰っていく。その間に日本からのオファーは一人もなかった。これは放っておくと、日本というのは若手がいなくなるぞと非常に恐怖心を持ちました。それを大学の先生に当時、相談しても、「いや、研究者になる人間は、それぞれの要素の研究をしたいのであって、そんな協力の研究なんかしたくないんだよ」と言われて、けんもほろろでした。それでも何とかしなくてはいけないと思うときに、当時、東京大学の先生の方から、そういうプロジェクトで人材育成をやるので、帰ってきて一緒にやらないかというお誘いを受けて、戻りました。

そのときに、最初からこういったネットワークを作らなければいけないと思いました。ただ、ネットワークを作るときに、今回のように組織として作ってしまうと、一般の研究者からは協力が得られずに恐らく動けないだろうと感じていました。ですから、できるだけ最初はインフォーマルに始めようとわざとやりました。いろいろな形で、いろいろな大学を調べて、そこにオフィシャルなレターを出して「集まってください」ということもできましたが、あえてそのようなアプローチをとらずに、個人的に非常に近い人たちに話をして、友達の輪ではありませんが、その講演者からさらにまた誰かを紹介してもらってという形で、非常にパーソナルなコミュニケーションで、とにかく実際にやりたいと思っている人間をちょっと集めようとしてきています。とにかくオフィシャルにやるのではなく、意志のある人間を集めて、その人たちで実際に成果を出してしまおうと考えた次第です。具体的な成果を出せば、それがモデルとなって、次々つながっていくだろうというような戦略を、わざと取っています。

今回も、「何でこの人？」といわれると、「いや、個人的な友達だから」とか、「非常によく知っているから」という形でプロジェクトを組んでいます。そうでなければ、恐らく最

初からオフィシャルに始めてしまうと、みんな二の足を踏んでしまうでしょう。だったら、やる意志のある人間が固まって、まず成功例を作っていこう。その成功例を見せれば、みんな「あ、ああやればいいのだ」と。そういうロールモデルができてくれば、次につながるのではないかという戦略をあえて取っているというのが、わざとやったところです。

（伊藤）　そのほかにございますか。特にないようですので、これで第３セッションを閉じさせていただきたいと思います。